
R u b y e y e s 進む道はあるから

高田高

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

Ruby eyes 進む道はあるから

【Nコード】

N8063D

【作者名】

高田高

【あらすじ】

高品町に住む高校生、蒼真明人。騒がしいのを嫌う彼の居るクラスに転校して来た少女は……。

1・girl 出会い (前書き)

恋愛ジャンルにしてありますが、ラブコメ目指したらコメディイ
になってしまいました。でも恋愛です。あくまでラブコメです。

1 . g i r l 出 会 い

あちらこちらで都市開発が進行する町、高品町。

ほんの数年前までは田園風景がパノラマで広がる、これでもか、と言っくらしいの田舎町だったのだが、今では農家を生業にする者も少なくなり、果樹園や水田は無機質なコンクリートへと姿を変えていた。

そんな町に住む俺こと、蒼真明人は、高品の片田舎にある、オンボロ高校に通う平凡な学生だ。

照り付ける朝の陽射しに、俺は左手を差し出し、それを防ぐ。

「太陽が眩しい。眩し過ぎる。徹夜した後の太陽は憎らしいだけだな」

容姿、学力、運動、性格。どれを取っても並レベル。しかし、そんな俺がなぜか、女子には多少なり人気がある。その理由と言うのが、

「やほー！ 今日キレイな銀髪だねえ！」

「惚れた？」

「ばあーか」

短く切り揃えた銀髪。これが女子に多少なり人気がある理由。ちなみに、俺の後頭部を打楽器でも叩くようにして、いつもの挨拶

拶をしてきたのは、中学からの腐れ縁、しまだき はるみ 島崎春美。

栗色のショートヘア、小柄な体格。これと言って特徴は無いが、俺の隠すほどでもない秘密を知る一人だ。

秘密と言うのは いや、秘密なんだから教えるわけがない。

「何ぶつぶつ言ってるの？ 念仏？ お経？ 白昼夢？」

「なんでもない。お前はホント、うるさいな。子犬だな」

「子犬？ 何犬？」

ダックスは胴長短足だからヤだし、チワワは目が大きすぎかな？
パピヨンはフサフサで可愛いよね」

「ああー！ うるさい！ お前はあれだ！ パグ！」

「うわっ！ こんなベリキュートなレディーに対してヒドくない！
？」

ベタな漫才をしながら登校するのが、俺と春美の毎日の日課。

春美のボケを無視すると、それはそれで、ツッコミが甘い！ だの、やる気あるんですか？ だの、ダメ出しを受けて結局うるさい。そのため、いやいやながら毎日こうして相手している。

俺達は、校舎二階廊下を進み自分達のクラスへ向かっていた。
2-Bが俺と春美のクラス。

「今日さ、転校……転入？ とにかく、ウチのクラスに来るみたいよ？」

「転校な。知ってるよ。」

にしても、なんだって土曜に来るんだ？ 来週でいいだろうに」

ちなみに、春美とは中でクラスが一緒になってから、高校どころかクラスも一緒。運命の糸と言うより、妙なエネルギーに繋がれているようで、時折本気で不安になる。

教室に入り、俺は窓際の前から五番目の席に腰を下ろした。

どうでもいい話だが、一列六席なので、ほぼ最後尾。ただ、真後は空席。恐らく転校生の席だろう。更にどうでもいい話だが、春美は四列目の二番目。

しばらくしてホームルーム開始のチャイムが教室に響いた。

ホームルームとは、戦争時代、軍が行ったものらしいと聞いた事がある。まったく、日本人は面倒なものばかり残したがる。

教室の戸が開くと、担任教師と、その後に女子生徒が入って来た。両側で束ねた長い銀髪、透き通るように白い肌、そして、

「今日は転校生を紹介する。リア、自己紹介して」

女子生徒はぺこりと頭を下げると、にこやかに微笑んだ。

「シヴァーディア・リアリーデです。気軽にリアと呼んで下さい」

微笑み掛けるリアの瞳は、真っ赤。充血によるものではなく、黒目が血のように真紅。

ただ、珍しいわけではない。そんなヤツは世界中に何億という。

「リアは見てわかる通り、ルビーアイズだが、まあ、今では珍しくないし、仲良くしてやってくれ。」

リア、席は蒼真の後、って蒼真はあいつな。あいつの後だ」

「はい」

リアは長い髪を揺らし、俺の後の席につくと、背中をつんつんと突いてきた。

「なに？」

少し驚いた表情の俺に、リアは微笑んでいる。ただ、口もとは先程と違い好印象なものではなく、悪寒を感じるほど不気味ににやけている。

「そんなに警戒しないでよ。あなた、ブリードでしょ？」

「……お仲間の匂いには敏感、ってわけか」

「私はピュアヴァーンだけどね」

俺の秘密。それはブリードである事。

ブリードとは、人間と異種族との混血種の事。

ピュアヴァーンは、混じり気のない、純粹種。

数十年前、ある研究所で起きた事故により、超異常力場が発生。

それが原因で、いわゆる別次元とこちらの世界が融合してしまった。

別次元にも当然ながら生物が存在し、それが異種族、ルビーアイズ。最初の頃は互いに警戒していたが、ルビーアイズ側の和平交渉

により、今では平和的な付き合いをしており、あちこちで見掛ける。
とは言え、こんな片田舎ではルビーアイズの存在は珍しいもの。
当然ブリードも珍しい。

騒がしいのが苦手な俺は、それをネタに騒がれるのを嫌い、髪を
染めていると言っ事になっている。

ちなみに俺は、ルビーアイズが苦手だ。

「よろしくね、蒼真」

「よろしく、シヴァさん」

「なんでシヴァさんなのよ？ 普通リアさんでしょ。第一、シヴァ
さんて男みたいでやなんだけど」

「もう授業はじまるぞ、シヴァさん」

「……ムカツクなあ」

むくれるリアを無視して、俺は姿勢を正面に戻し、授業の準備を
はじめたわけだが、何かの頭に当たる。頭にいくつも乗っかって
いる、恐らく消しゴムのカスだろうそれを払うと、再びリアの方に
体を捻った。

「何してんの？」

「あのさあ、ペン、貸して？ 朝慌ててたから、忘れてきたみたい」

「……」

「ちよっ！？ 無視しないでよー！」

「ほれ」

俺は渋々ながら、安物のレザー仕様の筆入れからペンを取り出し、リアに渡した。それを手渡されたリアの表情は、あまりうれしそうではない。

「赤ペン？ 普通シャーペンでしょ？」

「赤が嫌か？ 黄色もあるぞ？」

リアはため息をつく、体を伸ばして俺の筆入れを取り上げ、シャーペンを奪い取った。

「ええー！？ くれるの？ 蒼真はやさしくなあ〜」

「……勝手にしろ」

ルビーアイズの苦手なところ、その一。基本的に誰もが異様にデシジョンが高い事。かくゆう、ルビーアイズの俺の母親も底抜けに明るい。

落ち込むのは、買い置きであったプリンを食べられた時くらいなものだ。

俺は再び黒板に向かうと、またまたリアは背中を突いてきた。それに対し、深くため息をつく、またまた体を捻った。

「今度はなんだよ？ 消しゴムか？」

俺の少し怒りのこもった言葉に、リアは首を横に振ると、にかっ

と、歯を見せて笑顔を浮かべた。

「ありがとう!」

まるで悪戯っ子の見せる笑顔に、俺もつられて笑顔になっていた。

「歯、青のり付いてるぞ」

「嘘っ!?!」

「嘘だよ」

「……ムカツクなあ」

ルビーアイズは、どうしてこいつも騒がしいのか。
俺は苦手だ。

《続く》

1・girl 出会い (後書き)

ちよーっとSFファンタジーっぽいですが、世界設定は言わばスパイスであって、これ以降別次元側とのなんやかんやはありません。話の中心はあくまで明人とリアです。

2・hunger 吸血

昼休み。リアの席の周りは人ばかりが出来ている。その影響で、俺の居場所がない。

とりあえず静寂を求めて教室を出ると、二階の端にある美術室に向かった。

美術室は俺の憩いの場。昼休みに人が訪れない事も理由の一つだが、なにより、

「今日も来たのか。君は友人はいないのか？」

言葉に温度さのない、ぶっきらぼうな物言いをしながら美術準備室から出て来たのは、白衣にボサボサ頭の美術教師、伏見りょう《ふしみ りょう》。

名前や言動から男かと思われそうだが、れっきとした女性。

りょうは煙草を口にくわえ、こちらに近付くと、紙コップを手渡してきた。

ここに来るもう一つの理由は、お茶が飲める事。

「友人はいますよ。ただ、賑やかなのは苦手なんで、学校だけの付き合いですけどね」

「ドライなヤツだな、君は。そんな事だと……いや、説教は趣味じゃないから、いいか」

りょうは、水を汲んだビーカーに煙草の吸いがらを浮かべると、背伸びし、俺に、にやけ顔を向けた。

「今日、ルビーアイズが来ただろ？ 可愛い娘か？」

「……」

しばしリアの事を思い浮かべる。髪はきめ細かく、綺麗。肌は透き通るほどに白く、誰もが触れるのをためらうほどだろつ。

外見だけで言えば、人間のアイドルなど目じゃない。

「なんだ？ そうでもないレベルか？」

「見た目はかなりレベル高いですよ。って言ってもルビーアイズはみんな銀髪で肌は白いですけど」

「まあ、確かにな」

りょうは上着の内ポケットから煙草のケースを取り出すと、一本だけつまみ上げ、火を付けた。

生徒の前でこうも堂々と煙草を吸われると、注意するのもバカらしく感じる。

「君は女に興味ないのか？ 同じクラスの島崎だったか？ あれとも仲が良いだけで、特別な関係じゃないんだろ？ それ以外の女子とも特に付き合ってるわけでもなし。」

「……ホモなのか？」

「違いますよ！ 全力で違います！

騒がしいのは、母親だけで足りてるんですよ」

「……マザコンか」

「違いますよ！」

りょうのいらん気遣いを受けながら昼を食べ終わると、教室へと戻った。

リアを取り囲んでいた連中はようやくいなくなっており、俺は自分の席に座る事が出来た。

と同時にリアが俺の襟首を掴んだ。

「離せ！ 苦しいだろ！」

振り向くと、リアは少し表情を暗くしている。

「どうかしたのか？」

「お弁当、忘れた」

異種族だろうと、体内構造が同じである以上お腹は空く。当然食物を接触するため、お弁当は人間同様必需品。教科書忘れても弁当忘れるな、と言う格言があるくらいだから、学生生活において弁当のしめる割合はかなりのものだ。

「空腹で頑張れ」

「鬼！」

「俺、弁当食っちゃったし、金も無いから売店で買う事も出来ないし。」

「そもそも弁当分けるつもりも、金を貸すつもりもないけど」

「悪魔！」

リアの睨み付けける視線を無視して、次の授業の準備をはじめようと机の中を覗いた瞬間、襟から少し出ている首筋に、冷たい感触が伝わり、首筋を押さえて立ち上がった。

リアがしようとした事に対し、俺があまりに過剰に反応したため、リアは驚いているのか微動だにしない。

「お腹、空いたからつい。あの、ごめん」

子供が見せるような悲しげな表情に、ため息をつくとき、リアの手を掴み教室を出た。

「一回だけだからな！」

「あ、ありがとう」

空腹のせいかな、リアは先程のハイテンションが嘘のようにしおらしい。

出会って間もないルビーアイズに、なぜここまでしてやるのか、俺自身理解出来ない。

わけのわからない苛立ちを感じながら、再び美術室に向かうとき、りょうがない事を確認し、俺は上着を脱いだ。

「それじゃ、頂きまーす」

リアはご馳走を前にしたように舌なめずりすると、俺の首筋に噛み付いた。

先程教室で首筋に触れた冷たい感触は、リアの牙。ルビーアイ

ズは食物接触以外にも、体液、つまり血液からも栄養を吸収出来る。それがルビーアイズが苦手なもう一つの理由。

首筋に触れるリアの柔らかい唇の感触と、僅かに肌を刺す牙の冷たい感触が体中に伝わり、少しばかり意識が遮断される。

ゆっくり、優しく血液を吸い上げられる感覚は、痛感や快感などでは言い表し難い。

数分ほどの吸血を終え、ようやくリアは首筋から牙を離すと、唇や手についた血液を丹念に舌で舐め取った。

「あのさあ……その舐めるのどうにかならないのか？」

「どうにか？」

手にこぼれたり、首筋から流れ出た血液も丹念に舐め取るのが、ルビーアイズの習性のようだが、俺は正直恥ずかしくて直視出来ない。両親の吸血行為はノロケのようで腹が立つが。

「うーん、無意識だからどうにも。なんで？ 変？」

「なんか、こっつ……」

とその時、五時限目開始のチャイムが美術室内に響き渡り、二人は教室へ走った。

「ねえ、蒼真！」

「なんだよ！ ……ああ、お前吸い過ぎだろ、頭クラクラする……」

「あのさ、明日も吸わせてよ」

「一回だけだつて!」

「ケチ」

「ケチで結構」

毎日のように吸われたらこちらの血液補給が間に合わず、いつかすっからかにされてしまう。冗談じゃない。

けど、リアの笑顔を見ていると、なぜかそれも悪くない、などと思ってしまう。会って間もないのにそんな事を思うなんて、今日の俺はどうかしている。

本日の授業が全て終了し、帰宅部に所属する俺は帰宅部員らしく、さっさと家に帰ろうと席を立った瞬間、リアに手首を掴まれた。

嫌な予感がしながらも、リアに目を向けると、

「お腹空いた」

「他のヤツに頼め!」

「ブリードの血が一番おいしいの! それにみんな初対面で頼みずらいの!」

「俺も初対面だけだな! いいから離せ! 俺の血が無くなる!」

二人のやり取りに辺りからくすくす笑う声が聞こえ、俺はそれに耐えられず、リアの手を払い教室から出た。

すると、リアも後を追いつけ教室を出て来た。

「付いて来るなよ」

「私も帰るだけですう！」

二人はまるで軍隊の集団移動のように、一指乱れぬ動きで階段を下り、下駄箱で靴に履き替えていると、そこへ春美が現れた。

どうやら一部始終を見ていたらしく、薄ら笑いを浮かべている。

「もうなに〜？ いつの間にかそんな面白い仲になったわけえ？

思わず吹き出しそうになったじゃない」

「吹き出した後だろ」

「えーと、同じクラスの人ですよ。ごめんなさい、まだ名前覚えてなくて」

リアの申し訳なさそうな表情に、春美は笑顔で両手を振った。

「いいよ、いいよ。」

改めて自己紹介するね。私は、島崎春美。こっちは、」

「俺はいいだろ？」

「ごめんなさい、どちら様でしたっけ？」

リアと春美の連携に、いい加減ツッコむのも面倒になった俺は、さっさと歩き出した。

「いいよ、もう。いつそ覚えなしてくれ！ もう俺帰るから！ じやあな！」

立ち去る俺を見送ると、残ったリアと春美はくすくす笑い合った。

「スネてやんの！ カワイイー」

「あんまりイジメると、蒼真が可哀相だよ」

二人は笑いながら、遠くに見える背中を追い掛け走り出した。

《続く》

2・h u n g e r 吸血（後書き）

高校って土曜日は昼まででしたっけ？ なにぶん学生だったのは昔の話なもので。まあ、高品高校は5時限目まであるって事で。

ちなみに作者はバリバリ男なんで、当然言動から行動から男視点です。つまり、幻想入ってます。ここでこんな事言う女い

ない、とかあると思いますが、そこは大目に見て下さい。

3・Wolf&vamp 我が家

帰り道。いつもなら一人静かに風景を眺めながら帰るわけだが、今日は違う。やたらとうるさい二人のせいで、俺のテンションは沈みっぱなし。

「どうしたのアキ。女の子二人に挟まれて幸せじゃないのかい？」

「うーん、やっぱり昼に吸い過ぎたのが原因？」

「あらー、早くもそんな関係に？ アキも隅に置けないねえ！」

出来れば隅に置いたままにして欲しい。

道中ずっとこんな調子で、休む暇なく二人は会話している。ずっとしゃべっていて疲れないのだろうか？ 口の中が乾かないのだろうか？ 俺は聞いているだけで喉が渇く。

「ところでシヴァはウチこっちなのか？」

リアはシヴァと呼ばれるのが相当嫌なのか、目は口程に物を言う以上の訴える視線を向けている。

「シヴァって言うな！ リアでいいから！」

「わかったよ。それでウチはこっちか？ シヴァ」

その瞬間、俺の足の爪先をリアは思い切り踏み付け、さらにぐり捻った。

「つてえー！ 暴力反対」

「あんたが悪いから。もう絶対明日血を頂きますから。なんなら今から頂きますから」

「ごめんなさい、もう言いません」

「わかればよろしい」

二人のやり取りに、春美はくすくす笑うと、俺とリアの間に入り、腕を絡めた。

「な、なんだよ？」

「ん？ アキに彼女が出来てよかったなあーって」

「「えっ？」」

俺とリアは予想し得ない言葉に声を上げると、顔を見合わせた。

「見つめちゃって、早速ラブラブですかあ〜？ 私は邪魔者ですかあ〜？」

「何言ってるんだよ。なあ？」

「……」

俺の声が届いているのかどうなのか、リアはうつむいたまま返事をしない。

リアの態度の落差に春美は焦りの表情を浮かべ、絡めていた腕を解いた。

「あの、あれ？ リアちゃん？ ご、ごめんね。冷やかし過ぎたかな？」

「……え？ あ、ううん、そんな謝らないで。ただ、そう言うの慣れてなくて……」

ルビーアイズであろうと人間であろうと、好意、特に恋愛感情と
言うものは、等しく複雑怪奇で難解なものらしい。

そんな態度のリアに改めて気付く。瞳が赤かろうが、吸血しよう
が、同じ生き物であると。当たり前的事、普通の事ほど盲目しがちな
のは人間の悪いクセだ。

「なあ、リア」

「へっ!？」

俺の言葉に相当驚いたのか、リアは声が裏返った。

「そんな驚かなくても……、まあいいけど。」

「うちこっちなのか？ ずっと同じ道だけど、間違えてないのか？」

「ああ、うん、こっち……」

相変わらずリアの表情は少し元気がない。元気がない、と言うよ
り、困惑、錯乱しているようで心ここに在らず。

「リアちゃん、大丈夫？ アキの血なんか飲んだから体調崩した？」

「つくづく失礼なヤツだな、お前は！」

「だって、アキの血だよ？ 想像しただけで吐き気が……」

そこまで言うなら飲んでみる！ と言いたいところだが、人間が人間の血を飲んでもおいしいわけがない。むしろ鉄の味が口一杯に広がるだけだろう。

そんなこんなで歩く事15分。俺の家が見えてきた。

「っと、じゃあここで。春美、腹出して寝るなよ。リア、また来週な」

「腹出してって、なにさ！ した事ないよ！」

「……あれ？ 蒼真の家って……。」

蒼真、ちよっと待って」

「なんだよ？」

振り返った俺が見たものは、俺の家と持っている地図とを交互に見ながら、顔を青くするリア。

少し、いや、かなり嫌な予感がする。

「俺の家が……何？」

「蒼真のお母さん、名前は？」

「サリーだけど？」

「サリー・ウエイトン？」

「旧姓な。それが何？」

リアは両手で頭を抱えると、その場にしゃがみ込んだ。

「パパのバカ！ 同い年の子がいるって、男じゃない！ マズイよー！」

リアの反応から推理するに、いや、推理するどころか、ヒントが正解のCMのクイズのようなものだが、要するに、俺のウチにホームステイ。

今朝、母が仕事に出掛ける前になにやら電話で長話していると思っていたが、ホームステイに関してだったわけか。

「確かにマズイな。俺の血が危険だ」

「そうじゃないわよ！ 男はオオカミなんですよ！？ オオカミ男と一緒に暮らすわけ！？」

「お前だって吸血鬼みたいなもんだろ」

「まあまあ！ じゃあさ、ウチ来なよ？」

春美の優しい言葉に、リアは涙目で首を横に振った。

「そうはいかないの。パパすごく心配性で、出掛けると10分に1回は電話掛けてくるほどの。」

それで、こっちに転校する事になった時、ウェイトンさんの家なら安心だからって」

「そ、それなら場所変えたって言えば、」

「そんな事したら、心配だからってパパも泊まりに来るかも。多分、来るよ」

「うわあ、それは嫌かも」

娘が心配な父親。少々、いや、かなり度が過ぎてはいるが、親子の愛情も人間とまるで同じわけだ。

ただ、娘を縛り過ぎではなからうか？ これでは過保護を超して監視。

「じゃあ、母さんにわけを話して、ウチに居るって事にしておいて、春美のそこに行けばいいだろ？」

春美のウチはカップラーメンが出来上がるくらいの距離だから、何かあればすぐこっちにこれるしな」

春美のウチは目と鼻の先。ただ、小さい頃からの付き合いではない。理由は簡単、中学の時に春美が引越して来たから。

俺の提案にリアはうなずくと、とりあえず届いているであろう荷物を取りに我が家へ向かう事にした。

余談だが、リアは本日の登校は、丸々準備して直接自宅から学校まで来たらしい。そんな事したせいで、面倒な事になったわけだ。

そうでなくても結局は面倒なのか？

「ただいまー」

「お邪魔しまーす。で、いいのかな？」

「どっちでもいいだろ。どうせ誰もいないし」

「だったら、ただいま、なんて言わないでよ。まぎらわしい」

玄関の戸を開けると段ボール箱が山積みになって、正面の廊下を占領していた。

荷物が届いたものの、両親とも仕事に行くため片付けもせずに出掛けたのだろう。

お陰で運び出す手間は省ける。

「……14、15……」。

15か。多いな。無理だ」

「一個づつ運べばいいじゃない！ ほらっ！」

「春美呼ぶか。ってなんであいつは帰っちゃまったんだよ。手伝うべきだろ」

「もういいから！ さっさと運びなさいって！」

「お前に吸われたせいで今はダメ」

あまりのヘタレっぷりに、とうとう頭にキタらしく、リアは俺を押し倒すと首筋に噛み付いた。

「イタっ！ 痛いって！ 歯が食い込んでるっ！ さっきよりめり込んでるから！ おい、聞いている？」

怒りにまかせて噛み付いたらしく、俺の声は聞こえていないようだ。昼に吸われた時に比べ、随分乱暴に吸われているせいで、全身に力が入らない。

「お、お前、俺を殺す気が！？」

リアはようやく我に返ると、首筋から口を離し、体を起こした。

「つい、おいしくて」

「つい、で殺されてたまるか！ ……あ」

言うておくが、ここは玄関先。家族が帰宅した場合、当然鉢合わせになる。

そして、顔を玄関先に向けた俺の視線の先には、にやけた表情の母親がで龜していた。

それに気付いたリアは、俺に乗り掛かったままの姿勢でサリーに挨拶した。

「あ、あの、お邪魔してます。リアリーデです」

「ああ、キリアンの娘さんね。よろしく！」

「あ、はい。よろしくお願ひします」

「おい、コラ！ とりあえず、退け！」

R u b y e y e s 進む道はあるから

《 続 く 》

3・Wolf & Vamp 我が家（後書き）

リアがちよつと大胆に吸血し過ぎですか？ これからもっと作者の幻想入りますよ！ こんな吸われ方ならいい、みたいな。

あの、あれですよ？ 変質者じゃありませんよ？

4・heavy 転居

「そう言う事だったの」

「はい。すみません」

「いいの、いいの。キリアンも慌て者なところは変わってないわねえ」
オオカミと一緒に暮らすのは年頃の女子としては断固拒否したい、と言う事をサリーに話すと、それを快く了解した。
しかしながら、俺ことオオカミはすでに殺され掛けたわけで、その事を踏まえると、一刻も早く出て行って欲しい。

「あのさあ、少しは手伝ってくれないかな？」

リアとサリーはリビングで茶をすすりながら話をしているだけで、荷物を運ぶ気などサラサラない様子。俺と先程帰ってきた父親の高^{たか}俊の二人で、段ボールを運搬している。

「明人、女性に力仕事を手伝わせるようじゃダメだぞ。男なら黙って運べ」

「高俊さん、ステキよ!」

「そ、そうか？」

ウチの両親は仲が良い。結婚二十周年を迎えても尚新婚のようだ。理由の一つは、ルビーアイズは最盛期の外見を保つ年齢が、人間よ

り遙かに長い事。サリーはとうに40を超えているが、外見は20代前半のまま。

人の愛情は外見によるものではないと言うが、美しい方が得なのは当然の事だ。

ちなみに人間である高俊も40を超えているが、相応のダンディズムが感じられる。老けではなく、渋くなったわけだ。こんな親父に俺もなりたい。

「明人」

「なに？」

「すまん、腰にキタ。あと頼む」

高俊はよろけながらリビングに向かった。
情けない父親の後ろ姿。 前言撤回。 あんな親父にはなりたくない。

荷物をトラックの荷台に運び終わると、発進させ、数km進んだ先で停車、荷物を下ろす作業に移った。 とんでもなく無駄な事をしている気がするの、俺だけだろうか。

とは言え、今回はリアと春美も手伝ってくれているので随分楽だ。高俊は腰痛を理由に運搬をサボり、運転席でサリーとイチチャイチャしている。

「……ねえ、蒼真」

「ん？」

「蒼真の両親で、すごく仲良いね。なんか、こっちが恥ずかしくなるくらい」

「恥ずかしい？ 俺はムカツクけどな」

イライラしながらも荷物を下ろし終わると、次はそれを部屋に運ぶ作業に移るわけだが、さすがに一日に二回も血を吸われたせいで、俺はすでにグロッキー。春美宅の玄関先に腰を下ろし、休憩する事にした。

「お疲れ様」

「あゝ、おにぎりがうまい」

春美の母親、静絵しずえの差し入れのおにぎりにかぶり付くと、空の胃袋に流し込まれ、胃袋が動くのを感じた。

「これもどうぞー」

春美が差し出したのは、味噌汁。具を見る限りインスタント。しかし、疲れた体にはインスタントの濃い味付けが調度良い。

「あの、島崎さん。急に押しかけてごめんなさい」

「いいよ。アキのところに泊まる方がよっぽど不安だもん」

「まったくだ。俺は明日の陽を見ずして、あの世に送られるだろうからな」

「やめてよ、もう。」

……考えるとさあ、吸いたくなるんだけど」

リアの見つめる先は、当然俺の首筋。舌なめずりでもしようものなら、ダッシュで逃げ去るところだ。

「もうダメだぞ。献血に行ったら、逆に輸血されるくらい吸われたからな。」

これ以上吸われたら、ホントヤバイから」

「……わかったわよ。じゃあ島崎さんの、」

リアが振り向いた瞬間、春美は静絵の後に隠れ、視線が静絵に移ると、静絵は、お風呂の湯止めなきや、と言いながら風呂場へ向かった。

そしてその八つ当たり先は当然、

「イタっ！？ ちよっ！？ リア、ホントダメだって！ 吸うな……って」

春美はその状況を頬を赤くしながら見つめていた。助けようものなら、自分が噛まれるとわかっているため、あえて傍観しているのだろうが、助けてくれないと血が……。

「……ぷあ。」

はあ、やっぱりブリードの血はおいし……て、蒼真大丈夫？」

「……し、死ぬから、ホント……」

近寄って来た春美は、ぐったりする俺を介抱するでもなく、リア

の隣に座ると、口もとの血をハンカチで拭き取りはじめた。

「リアちゃん、アキの血あんまり吸い過ぎると頭が悪くなるよ」

「じゃあ、島崎さんのを」

「好きなだけ、アキの吸って」

俺の寿命がロウソクで表せるとしたら、今現在急激に短くなっているだろう。そして、消費スピードは加速するばかりで、減速はない。まるで生死の世界を滑走するF1レーサー。

ただし、俺の場合、華やかなゴールフラグとともに結局命尽きるわけだが。

疲労なのか吸血によるものなのか、とにかく体は鉛のごとのだが、それでも荷物運びは手伝わされた。重労働を強いられる奴隷の気分。

「……これで、最後……」

「ご苦労様」

「……ねえ、俺ここで寝ていい？」

うつぶせに倒れている場所は、春美の部屋の前の廊下。

もはや寝るとかそう言うレベルの話ではない。意識が飛び掛けている。気絶寸前。

「何言ってるの。そんなところで寝たらまた吸うよ?」

「いや、あの……ホント、もう……」

迫り来る睡魔を追い払う事が出来ず、俺はまどろみにたやすく飲まれた。

「……あれ? ホントに寝ちゃったよ」

「うーん。リアちゃん吸い過ぎたんじゃない?」

「やっぱりそうかな。ごめんね、蒼真。次からは控めに吸うね」

リアは申し訳なさそうな表情を浮かべ、頭を撫でている。

「あー、謝りはしても、やっぱり吸うんだ」

リアの言葉に対して、10人中10人が春美と同じ意見を持つだろう。

次の朝。目を覚ますと、見知らぬ天井が映り、重い体を起こした。昨日の疲れ以上に体が重い理由は、俺の腕に人一人分の体重が掛かっているから。

「……リア?」

隣で寝ている、寝間着姿のリアに気付き、俺は首筋を押さえた。以前聞いた事がある。ルビーアイズは気に入った血を見付けると、意識が無い状態、つまり眠っている状態でも血を求めて徘徊し、吸血するらしい。

ここまで来ると完全に吸血鬼だ。

「このままだと、リアに血を吸い尽くされるかも。

それより、ここどこ?」

見慣れない壁、天井、家具。今寝ているのはソファー。

思考がはつきりした時、ようやく現状を理解した。

「……俺、あの後、寝ちゃった?」

問う必要はない。それ以外の答えはないのだから。いや、それ以外の答えの場合、夜中に侵入した事になるので、あまりよろしくない。

とりあえずリアを腕から離そうとするが、これがなぜだか剥がれしてくれない。寝ている人間は力のタガが緩いたため、全てにおいて手加減がない。

つまり、掴む方向に力が加わるとスッポンどころではなく、限界まで絞った万力に等しい。

「ヤバ、離れない! こんなとこ誰かに……」

「お、おはよー」

「……はよー」

春美は状況を確認するなり、再び自室へ戻ろうとした。

「待て！ 春美、助けて！」

「……うん？」

「リア！？ 起きたか！ とりあえず離れて！ 色々面倒だから、とりあえず離れて！」

俺の言葉に、寝ぼけ眼のリアはうなずくと、首筋に噛み付いた。

「ちよっ！？ リア！ 噛み付くな！」

「うわ、寝ぼけてるからなのか？ 吸引力が凄まじい……」

春美は、誰がどう見てもいちゃついているその様子に、薄ら笑いを浮かべた。 実際は地味に生命の危機。

「お幸せにい〜」

「幸せなのはリアだけだろ！？ 俺は死ぬから！」

「死ぬほど幸せ？」

「そんな事言ってな……、あ、ヤバ、頭、クラクラする……」

俺はその時、世界が白く塗り潰されていくのを感じた。

《続く》

4・h e a v y 転居（後書き）

サブタイトルの英語と日本語は訳になってませんか？ 英語の意味を調べると、ああ、そんな事言ってた、みたいな微妙な楽しみがあるかも？ 無いな。 作中詳しく服装の説明してませんが、以前服装の事で失敗したので止めました。今回は皆様に想像して頂く感じで。人物描写が適当過ぎて想像出来ませんか？ すみません。それと高校の制服はブレザータイプです。これ以外詳しく決めてません。

高品に古くからある寂れた商店街。そこを横目に更に歩くと、眼下に田園が広がる公園にたどり着く。今現在は田園風景ではなく、都市開発による工事現場しか見えない。

古くから親しんだ緑が、味気ない灰色に変わる姿はどこか哀しい。そんな年寄り臭い事を考えるのは、俺の趣味が散歩だからだろう。まるでセカンドライフを持って余す老人のようだ。

しかし、今日の散歩は賑やか。賑やかと言うか、よく吠える犬の散歩のようで、軽く鬱になる。

「蒼真、ここの眺めサイコーだね！ 空中公園とでも呼ぶのかな？」
とくに物珍しいはずもないのに、リアはやたらとテンションが高い。

ところで、なぜ二人で散歩しているのかと言うと、リアに町の案内を頼まれたため。春美も誘ったのだが、休みの日くらいゆっくり寝たいから、と拒否された。俺だって寝たい。

緑色のベンチに腰を掛け、うなだれていると、リアは隣に座り心配そうに顔を覗き込んできた。

「どうしたの？ そんなリストラされたサラリーマンみたいな、悲哀に満ちた表情浮かべて」

「お前に振り回されて疲れてんの。大部分は吸血によるところが大きい。」

吸血をもう少し抑える」

「無理！」

しつげとしては、ここでガツンと言うべきなのだが、そんな事を言おうものなら、早速噛み付かれるだろう。

なので、やっぱり命の危険を伝える事にした。

「首筋はさあ、大動脈やら静脈やらが通ってるわけだろ？　ここはさ、出血したら本当に危険なわけ。わかるよな？」

俺が首筋を見せてペシペシ叩いて説明すると、リアは俺の言う事など聞いていない様子で今にも噛み付きそう。

と言うか押し倒された。

「コラ！　離せ！　話の途中だ！」

両手を押さえ付けられ、馬乗りされているため、俺はただジタバタするだけ。更に、押さえる力は普段のそれと比較にならないほどの怪力。火事場でもないのに、火事場力が発動しているのか、とんとん生命の神秘である。

「ちよつとだけだから！　痛くしないから！」

「だいぶちよつとだろ！　とりあえず離れる！　周りの視線が痛いから！」

それはまあ、公園の、しかもベンチで見せる光景ではない。相手がルビーアイズで、吸血しようとしているにしても、随分いかかわしい体勢だ。

「大丈夫！ 私は全然気にしないから！」

「俺は大丈夫じゃないから！俺は気にするから！」

「目の前においしいものがチラチラしてるのに、我慢しろって言うのが無理なの！」

「わかった！家でなら吸わせてやるから屋外はやめろ！風紀的にマズイから！」

その言葉に、リアはようやく俺を解放してくれたわけだが、当然ながら自分の発言に頭を抱えてうつむいた。

「そんなに嫌？」

「嫌って言うか、血は大事なものだから。無くなると当然死ぬから」

「それは怪我なんかの出血の話でしょ？」

私達の吸血は、血を吸うのと同時にそれに近い栄養素の分泌液、ヴィゴニアアーゼってのを流し込むから死ぬような事はないよ？」

「ヴィゴニアアーゼ……、って、それなら血を吸う必要無いだろ？自分達で循環できるわけだし」

リアはその意見を否定するように首を振ると、口の前に人差し指を立てて少し左右に振りながら、ちゅちゅと舌打ちした。

「わかってないなあ。それは私達には栄養にならないの。ヴィゴニアアーゼが栄養になるなら、そもそも何も食べる必要無いでしょ？」

「つまり、あれか。人間にのみ反応するって事？」

リアは大袈裟に手を叩き、大正解ー！ と言いながら、俺を押し倒した。

まるで巻き戻し。

「だから、ここじゃダメだつて！」

「正解したあなたに、私のヴィゴニアーゼをプレゼント！」

「それと同時に俺の血が取られるんだけどね！」

「ギブアンドテイク！」

「互いに了承してこそだ！」

聞き届けられるはずもなく、俺の血液は今まで以上に大量に吸血された。

我慢の限界だったのだろう、リアの吸引力はサイクロン方式の掃除機のパワーなど目じゃない。見えないホコリどころか、カーペットごと吸い取りそうなほど。

お陰でいつも以上にぐったり。散歩コースがフルマラソンのように厳しい。

「た、ただいまー」

出掛けていて誰もいない我が家に、弱々しい俺の声だけが響き渡った。

俺はほふく前進しながら、なんとかリビングにたどり着いた。

ソファーに寝転がり、TVのリモコンを操作して適当なチャンネルに合わせると、番組の情報をBGMにして目を閉じた。

流れてきたのは今更ながら、ルビーアイズの身体構造なんぞの特集。正確には再放送番組。

『ルビーアイズ。これは人間が付けた呼称。正確にはヴィゴニストと呼ぶ。女性はヴィゴニスレテ。』

ヴィゴニストは温厚な種族で、友好的。

人間に近い、いや、人間とまるで変わらない身体構造でありながら唯一違うのは、吸血による栄養摂取が可能な事だ。

吸血の際同時に流し込む分泌液、通称ヴィゴニアーゼは、人間にのみ反応する高エネルギー源。

しかしながら、副作用はある。それは……』

とそこで急に番組は中断され、高速道路で起きた大規模な玉突き事故の情報に切り替わった。

『番組を一時中断し、先程起きました玉突き事故の情報を中継していききたいと……』

「玉突き事故か、人事ながら大変だなあ……」

などつつばやきながら、一時中断した番組のセリフの続きが気になつてしかたがない。

ヴィゴニアーゼに副作用がある。

とりあえず落ち着いて考えると、父親は元気だから命に関わる事

でない。頭も中から外から健康。脳障害も毛根へのダメージも皆無とすると……。

「アキ、お昼出来たよー。今日サリーさん留守なんでしょー、ウチにおいでよー!」

玄関から聞こえた春美ののう天気な声に、面倒な考えを止めると、腹ごしらえのため、春美宅へ向かう事にした。

「いらっしやーい、蒼真」

席に座るリアを見ると、俺は先程の疑問を思い浮かべずにはいられなかった。ヴィゴニアーゼの副作用、もしかしたらリアは知っているかも。

リアの隣に座り、聞くべきか悩んでいると、

「な、なにかなあー? 無言で見つめられると、さすがに恥ずかしいんだけどなあ」

質問の事ばかり頭にあり、ついついリアを見つめてしまったようだ。

向かいに座る春美がにやにやしている事から、相当な熱視線だったのだろう。

「リア、あの、」

「ん? なに?」

リアは食卓に並ぶ料理をつまみながら、適当に聞き流している。

「ちゃんと聞け」

「え？ うん……」

俺の真剣な表情に、リアはフォークを置くと、体をこちらに向けた。

春美からの視点で言えばお見合い状態？

「ヴィゴニアーゼってあれ、副作用あるんだろ？ それってなに？」

「ああー……。言わなきゃダメ？」

「ダメ」

「怒らないですよ？」

リアの言葉につなずくが、内心ビクビク。一体どんな恐ろしい副作用が……。

「あのう……。惚れ薬みたい……。吸われた人は、相手に心酔しちゃうの」

予想していた悲劇的結果ではないが、なんとも言えない。

俺が心酔しているところでも想像したのか、春美は笑いを堪えるのに必死らしく、プルプル震えている。

「俺はお前に惚れるのか？ 絶対なのか？ 確実にか？」

「1000%惚れる。心酔しちゃう。奴隷みたいに」

100%の10倍か。神様でもない限りどうしようもないな。一番気になるのは、最後の奴隷みたいになってところだけだ。

「……と言いたいけど、ブリードの蒼真の場合は5、60%かな？」

「そうなのか？ 脅かすなよ！」

「私に惚れるの、嫌？」

リアの向ける瞳は小動物が見せる、反対意見を受け付けられない反則的な輝くをしている。

考えてもみれば、リアは吸血衝動をイマイチ抑制出来ない事を目をつぶれば、ルックスからなにから全てにおいて五つ星。ヴィゴニアーズなどなくても……。

「嫌とじゃなくて……」

「無理しちゃって。実はもう効いてる？」

「っ!？」

リアの見せる笑顔に、一瞬呼吸が止まった。

何度も見た笑顔のはずなのに。今まで感じなかったはずなのに。胸を突くこの感覚。

「いや、これはヴィゴニアーズのせいだから。惚れたとかじゃないからな？」

「なに言ってるの？」

「ヴィゴニアアーゼのせいだとしたら、奴隷決定？ 冗談じゃない。」

《続く》

5・s l a v e 惚れ薬 (後書き)

ヴィゴニストやらヴィゴニアーズやら専門用語チツクなものが出てきましたが、要するに外人みたいな感じですよ。あまり深く考えちゃダメですよ。

6 : i m p u l s e 死滅 (前書き)

今回からサブタイトルでもわかる通り展開が急激に変わります。
読者ほったらかしにする可能性があるので、覚悟して下さい。

ヴィゴニスト。母親以外で近所にルビーアイズがいなかったため、大して気にもしなかったわけだが、自分の知識の無さに今更ながら閉口する。

リアにこのまま吸血され続けた場合、実際どうなるのか。惚れるだけ？ イマイチしっくり来ない答えだ。

それ以上に、食物摂取で栄養補給出来るのにも関わらず、なぜ吸血してまで栄養補給する必要があるのか？ どちらかで構わないはずだ。そんなに燃費が悪いのか？

昼を頂いた後、例のごとく血を吸おうとしてきたリアを払い、自宅に戻ると、それらについて調べる事にした。

気にし過ぎだとか思われそうだが、そう言うものだから！ では納得出来ないのが俺の性格だから仕方ない。

「ヴィゴニスト……………。これは……………違うか……………」

父の部屋にあるノートパソコンを駆使し、早く、簡単に、正確に答えを導き出す事にした。わけだが、どれもこれも情報は大差ない。それどころか、8割近くはまったく関係無いサイトにジャンプしてしまい、更にほとんどいかがわしい。

「……………ダメだな」

諦めかけていた時、ある研究所に関するサイトを見付けた。

峰ダークマター研究所、と書かれたサイト。

知らない者からすると、100%怪しいネーミングのサイトだが、

これは例の事故を引き起こした研究所の名前だ。
サイトを閲覧する中に、ヴィゴニストに関するレポートが書かれてある。

『ヴィゴニスト、呼称ルビーアイズの体内には面白い、いや、恐ろしい細胞群が存在する。』

吸血する事は先に述べたが、検査の結果、吸血により摂取した血液は、体内の一部細胞群に大量に運ばれる事がわかった。

ルビーアイズ自身気付いていないようだが、自分以外の体液を摂取、遺伝子変換する事でその細胞群の活動を休眠させている。

細胞内に組み込まれた遺伝子は、アポトーシス』

アポトーシスとは、自殺因子と呼ばれる遺伝子。

人間が胎外に出るまでに指に付いた水掻き状の皮膚が消滅するのは、水掻き部分の細胞がアポトーシスにより死滅するため。

つまり、ルビーアイズは吸血を怠ると体内の自殺因子により、細胞レベルで死滅すると言う事だ。

「なんでこんな大事な情報が流れてないんだよ。おかしいだろ？」

俺は抑えようのない苛立ちを感じながら、調査レポートを更にスクロールした。

『残念ながらこのレポートが大々的に発表される事はない。』

ルビーアイズ側の調査員が、これを信じようとせず、公式記録を抹消してしまったからだ。

もし、これを見る事があるなら、信じてくれとは言わない。ただ、吸血衝動を抑制させるような事をしてはいけない。

彼らにとって、血液とはまさに命綱だからだ』

モニターに映るレポートをほったらかし、俺は自宅を飛び出した。自分の中にあつたはずの、ルビーアイズの吸血行為に対するちっぽけな嫌悪感は微塵も無くなっていた。

血を吸わないと細胞レベルで死ぬ。

規模がナノレベル過ぎてわかりづらい事だが、死んだ細胞を補う事が出来るのは同遺伝子細胞だけ。

癌と違い、細胞を食う細胞ではなく、細胞自体が死を選ぶ。目を覚ませば取り返しがつかない。

春美宅の玄関を勢いよく開けると、リアを呼んだ。しかし、顔を出したのは春美だけ。

「春美！ リアは！？」

「散歩に行ったみたいだけど。どうしたの？」

「悪い、急いでるから！」

普段見せる事のない焦りの表情に、春美は何事かと首を傾げた。

「そんなにリアちゃんの事心配なのかしら？」

俺は今日歩いた場所をくまなく探す、ような暇はないので、ある一カ所に賭けた。

先程のレポートもそうだが、それと相俟って普段のリアの吸血衝

動に不安が重なる。

同じルビーアイズのサリーに比べ、リアは吸血衝動に襲われる期間が異常に短い。サリーは週に一、二回。リアは空腹を理由に吸血するのを除くと7、8時間毎にやたらと吸血したがる。

血を欲しがると言う事は、抑止が間に合っていないのだ。

「あいつのアポトーシス、動き出してるんじゃないのか!？」

頭をよぎる最悪の考えを振り払いながら、俺は公園にたどり着いた。

見渡すと、緑のベンチに座り目を閉じるリアを見付けた。

「おい、リア!」

リアの肩を乱暴に揺ると、寝ぼけているのか定まらない視線でこちらを見ている。

「どっしたの……?」

ほつけた表情のリアを思わず抱きしめると、いつも噛んでいる首筋にリアの顔を当てた。

「あおう、こんなに近付けられると吸っちゃっよ?」

「……」

リアは返事が返ってこない事に首を傾げながらも了承していると解釈し、口を開いた。

「頂きます」

首筋に触れる唇の感触は、最初、わけもわからず吸わせた時のものに似て、柔らかい。肌をいたわるように優しく牙を立て、吸い上げる力も吸っているのがわからないくらい穏やか。

「リア、死ぬな」

「……」

その言葉に、リアは一瞬吸血を止めたが、首筋に顔を押し付けられ、半ば無理矢理血を口に流し込まれた。

数十分後。今までの比ではない、長い吸血を終えると、ようやくリアは解放され、息苦しそくに呼吸した。

「どうしたのよ!? あ、危うく窒息、するところだったわよ!」

リアはあえぎあえぎ声を絞り出すと、ベンチにぐったりもたれ掛かった。

俺はリアの隣に腰を下ろすと、さすがに吸わせ過ぎたのか、うなだれた。

「……お前、なんでルビーアイズが吸血するか知ってるか?」

「栄養補給でしょ?」

返ってきた当たり前過ぎる答えに、俺はため息をついた。

知らなくてもいい。知ったら、どんな顔をするだろうか。きっと現実を受け入れられず、泣き出す。

泣き顔は、見たくない。

「お腹一杯だから、しばらくはいらないかな。
お腹空いたらまたよろしくね！」

「調子に乗るな」

「あれ？ いつもの蒼真？」

くすくす笑うリアの笑顔に安心し、俺はベンチから立ち上がった。

「俺、帰るな」

「私も帰るよ」

その夜。ある疑問、いや、不安を確かめるため、リアの父親であるキリアンに電話する事にした。

受話器の向こうから聞こえる呼び出し音に、言い知れぬ不安を感じる。

『もしもし？』

聞こえてきた声は、ルビーアイズ特有の温厚さを感じる男性の声。

「あ、俺、蒼真明人って言います」

『蒼真明人……？ ああ、ウェイトンさんの息子さんか。リアは元気がいい？』

「はい、元気過ぎるくらいです。

ところでリア……さんの事で、聞きたい事があるんですが」

『ん？ なんだい？』

キリアンの優しい声に、俺の抱いた不安は、もしかしてただの勘違いなのでは？ と感じさせるが、それでも聞かすにはいられない。確かめずにはいられない。

「リアさんて、もしかして……」

《続く》

6・impulse 死滅（後書き）

サブタイトルのimpulseは衝動と言う意味ですが、死滅からの自己防衛本能が吸血衝動と言う事からきているわけで、今までの英語と日本語がある意味イコールのだったものとは真逆な感じでしょうか。ノリで付けてるんで、深く考えないで下さい。

「一年、か……」

キリアンから聞かされた事実。

リアの体内に眠るアポトーシスは、生まれながらに僅かではあったが覚醒していたらしい。

幼少期、覚醒を防ぐため手術を受け、一部細胞を除去し、なんとか一命を取り留めたが、最近になって再び活動が見られた。

いっそ全て除去してしまえばいいのでは？ と思うが、そうもいかないのが、ルビーアイズの持つアポトーシスの嫌らしいところ。

なんと、全身全ての細胞がそれに変異する可能性があるのだ。

つまり完全に除去すると言う事は、結果全細胞の除去。アポトーシスの恐怖から逃れるには、死ぬしかない。最悪だ。

キリアンの話では覚醒するまでに残された時間は、たった一年。

余命短いと悟ったキリアンは、緑豊かで空気も汚染されていない、高品の片田舎にリアを預けたのだ。

キリアンは街に残り、アポトーシスを防ぐ手立てを探っている。

一緒に居たところで辛いだけなのだろう。こんな時でも器用に振る舞えないのは、人間と同じ。

キリアンが過保護だった理由は、そう言う事だったのだ。

そんな話を聞かされた俺は、リアに対して可哀相だとは思う。

でも……、

「会って何日だ？ 二日？ はは、そんなヤツのために、俺は何真剣に悩んでんだよ？」

バカらしい……」

わけがわからない。

今まで他人とある程度距離を置いて、全てにおいて傍観者を気取っていたはずの俺が、なんでこんなに。

「……なんとかして、助けてやれないのかよ！」

悩んでも、答えなど出ない。

問い掛けても、答えは返ってこない。

目にも見えないちっぽけな細胞に、太刀打ち出来ない。

悔しくて涙が出そうだ。

翌日。学生は学校へ、社会人は会社へと向かう。

誰もが大なり小なり悩みを抱えているのだろうが、余命一年、更に不治の病の悩みを抱えているのは、世界でも数えるほどだろう。

当然ながら、授業の内容など頭に入らない。

ただ、悩んでいるわけでもない。

どうにもならないなら、いつそ全てを、その瞬間に詰め込んでしまえばいい。頭の悪い答えかもしれないが、人間一人の知恵で出せるものなんてこんなもんだ。

放課後。俺はリアを連れて学校の屋上に向かった。屋上は常時解放され、周囲を囲うフェンスには有刺鉄線がぐるぐる巻きにされている。

その様は、プロレスの金網デスマッチ状態。

「空が綺麗……。空気が汚れてないんだよね」

空を見上げるリアの笑顔を見ると、とても一年後に死んでしまつとは思えない。今からでもいいから、冗談だと言って欲しい。

「今日ずっと暗いけど、何かあった？」

リアの心配そうな顔に、俺は頭に漂うモヤモヤを払うように首を振った。

「……あの、さあ」

「ん？」

なんて事はない向けられるリアの笑顔に、俺は目を反らした。その笑顔を見るだけで、逃げ出したくなるくらい、辛い。

「ちょっと、なんで目反らすかなあ!？」

「……いや、あの、ごめん」

「えっ!？」

俺の素直な態度に、リアはくすくす笑っている。明るい笑い声に、俺もいつの間にか笑っていた。

悩んでも仕方ない。

くすくす笑うリアに、俺は真剣な眼差しを向けた。

「もしも……後一年しか生きられないとしたら、どうする?」

リアはうーん、とうなりながら空を見上げ、しばらく考えると、何か思い付いたのかこちらに駆け寄ってきた。

「蒼真の血を毎日、毎朝、毎晩頂く!

あとは……、別にどうでもいいかな?」

「どうでもって……。やりたい事とか、食べたい物とか、買いたい物とかあるだろ?」

俺の問い掛けに、リアはいつもと違う寂しげな笑顔を向けた。

「……後一年……。蒼真なら、どうする? どんなにもがいても、どんなに頑張っても、後一年。」

私は……。特別じゃなくていい。パパがいて、島崎さんがいて、蒼真がいて……。それでいいかな?

向こうにはママが待つてるから、寂しくないよ?」

「……お前、まさか」

リアは俺の言おうとした事を理解したらしく、うなずいた。ずっと昔、子供の頃から、長くはもたない事を、リアは知っていた。

親の隠し事は、子供にしてみればガラスケースに隠しているようなもの。全て丸見え。

「何が寂しくない、だよ。泣きながら言うセリフか」

うつむくリアの肩は震えていた。
涙は堪えられないもの。笑ったり、怒ったり、泣いたりする事は
理屈ではないから。

特に辛い時の涙は、どうにもならない。

「蒼真！ 私、死にたくないよ！」

流れる涙を止める裏技なんて、俺は知らない。だからただ、抱き
しめる。

癒しにも、励ましにもならないかもしれない。それでも、それし
か出来ないから。

「……リア。俺、お前の事が好き……かもしれない」

「かもしれないって、何よ……バカ」

「ヴィゴニアーズのせいなんかじゃない。俺の気持ち……だと思っ

イマイチしまらない俺の告白に、リアはくすくす笑いながら体を
離すと、少し背伸びして唇を近付けた。唇はいつものように首筋
には行かず、俺の唇に重なり、数秒動きを止めた。

その後ゆっくり、名残惜しむように唇を離すと、リアは頬を赤く
染めながら微笑んだ。

「私は好きだよ、蒼真の事。出会った日に一目惚れ、みたいな……。
改まって言うの、なんか、恥ずかしいかも……。……よーし

！ 勢いに任せて、大声で言います！」

リアに涙は似合わない。

笑顔でいて欲しい。

笑い掛けていて欲しい。

生きていて欲しい。

やっと、気付いたのに！

お前の事、好きなのに！

後、一年なんて……！

「大好きだよ、蒼真！」

「俺も……。俺も好きだ！ リアが好きだ！
だから……。ずっと！ ずっと一緒に……。」

それだけで、もう

何もいらさないから

あれから二年後。

俺は高校を卒業し、キリアンが所長を務める研究所で働きはじめた。

研究所の名前は、アンチアポトーシス研究所。リアが高品に来てから半年後、キリアンはアポトーシスを完全に沈黙させる抗体を発見した。それはなんとブリードだけが持つ特殊なもの。

人間とルビーアイズとの間で遺伝子変化が起き、突然変異したものの。

ただ、培養、増殖してようやく効果を発揮するため、吸血しても僅かな効果しか期待出来ない。

完成品を待たずして、リアの中に眠るアポトーシスは覚醒してしまったが、それでも試作品により、一命は取り留めた。

しかし、脳内の記憶中枢全域にダメージを受け、一切の記憶を失った。

俺はその日、ようやく休暇を取り、研究所に附属するシヴァーデア病院へ向かった。

勢いよく戸を開けて入った病室入口の名札には、『蒼真・S・リアーデー』と書かれてある。

「ダメですよ。そんな乱暴に開けたら」

「会えると思うと、つい」

リアは病室のベッドをリクライニングさせ、体を預けている。

試作品の副作用により筋力が著しく低下し、今もまだリハビリ中。

病室入口の名札にある通り、俺とリアは結婚した。俺の記憶が残っていたのかと言うとそうではなく、強引に結婚した。

『結婚しよう!』

『……え? あの、失礼ですが、あなた誰ですか?』

と言う感じ。

リアの混乱を無視して籍を入れたため、しばらく口を聞いてくれなかった。

「リア、調子はどう?」

「快調ですよ。明人さんはお仕事どうですか?」

「アンチアポトーシスの量産が軌道に乗ったんだ。これでもう、ルビーアイズが吸血衝動に襲われる事も、アポトーシスに怯える事もなくなる」

吸血理由であるアポトーシスの抑止が必要なくなれば、当然血を吸う必要がなくなる。瞳が真紅な事を除けば、なんら人間と変わらない身体構造になるわけだ。

「吸血? アポトーシス? 明人さんのお仕事は、難しい言葉ばかりですね」

俺に向けられたリアの笑顔は、あの頃と何一つ変わっていない。

いつだったか、記憶障害である事をリアに告げた時、悲しむでもなく微笑みながら言った言葉。

『過去は思い出せないけど、未来は、進む道はあるから』

R u b y e y e s 進む道はあるから

過去を思い出せなくなっただけいい。

これから全てをはじめればいい。

進む道は

あるのだから

R u b y e y e s 進む道はあるから

f i n

7・distance 未来（後書き）

実はヴィゴニアーズは精神昂揚作用があるだけで、心酔するような効果はありません。とは言え、昂揚状態の時に密着されて、吸血されたらそんな気になるのではなからうか。相手にもよるか。

かなり展開が急でしたが、これを読んで何かしら感じるものがあればうれしいです。どこかで

でん助作品を見掛けたら覗いて見て下さい。それでは。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8063d/>

R u b y e y e s 進む道はあるから

2009年3月24日11時46分発行